

辯護國文書第二五八九號

頁	行	正	誤
二十以下全部	削除		
三全部	削除		
四三〇八号	削除		
四七、十二	陸軍ノ態度ニ明シテハ田中少將ノ		テ△陸軍ノ態度ニ明シテハ田中少將ノ

正誤表 (岩畔豪雄口供書)

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國 其他

對

荒木貞夫 其他

宣誓供述書

供述者

岩

崎

豪

雄

自分儀我國ニ行ハルル方式ニ從ヒ先ツ別紙ノ通り宣誓ヲ爲シタル上次ノ如ク供述致シマス

岩 畔 豪 雄 口 供 書

一、私ハ岩畔豪雄ト申シマス

住所ハ東京都大田區田園調布二ノ七八九デアリマス
 年齢ハ五十歳デアリマス

經歷ハ大正七年十二月陸軍歩兵少尉任官、昭和七年七月關東軍參謀
 同十一年八月以降陸軍省參謀本部ニ勤務シ昭和十四年二月陸軍省軍
 事課長、同三月任陸軍大佐、昭和十六年二月軍務局附トシテ米國出
 張野村大使ヲ補佐シマシタ、同八月歸國、爾後歩兵聯隊長、岩畔機
 關長ヲ經、同十八年三月任陸軍少將トナリ次イデ「スマトラ」軍政
 部總務部長、第二十八軍參謀長ニ遷任シマシタ。終戰當時ハ陸軍兵
 器本部附デアリマシタ。此ノ間私ハ一九三八年（昭和十三年）八月
 カラ一九四一年三月迄軍務局軍事課ニ勤務シマシタ

從ツテ外交問題ニツイテモ一應ハ存ジテ居リマス、國防ニ關スル涉
 外事務ハ此ノ局ニ於テ研究セララルカラデアリマス

二、外交政策ニ對スル陸軍ノ意見ハ國防方針ニ基イテ起ルモノデアリマ
 シテ、此ノ國防方針ハ參謀本部が主管デアリマシタ。又參謀本部ハ
 軍事情報並ニ之ニ關連スル外交情報ヲ收集調査スル義務ヲ持イ「ア

タシニエーヲ管理シテ居リマシタ。從ツテ外交政策ニ對スル陸軍ノ意見ハ參謀本部カラ發表セラレル慣例デアリマシタ。軍務局ハ參謀本部カラ移サレタ事項ヲ陸軍大臣ニ報告シ陸軍大臣ノ意圖ニ基イテ外務省ト交渉スルコトニナツテ居マシタ。逆ニ外務省カラ問題ガ提起サレテ來タ場合ニハ軍務局ハ之ヲ參謀本部ニ移シ、其意見ヲ求メタ上、大臣ノ決定ヲ得テ外務省ニ回答スルト言フ譯デアリマス。從ツテ軍務局軍務課ニハ國防ニ關スル外交ノ事務ヲ處理スル爲量カニ二、三名ノ特校ガ勤務シテ居タニ過ギマセン

三、日獨伊三國同盟ニ就テ

(1) 日獨伊三國同盟ガ繼獨武官カラ傳達セラレタノハ一九三八年ノ八月頃デアリマシタガ當時ノ近衛内閣ハ未ダソノ問題ヲ正式ニ取り上げナイ中ニ降職シ、次イデ平沼内閣ガ出來マシタ

三國同盟ノ締結可否ノ問題ガ正式ニ取扱ハレタノハ此ノ平沼内閣ノ成立後間モ無クノコトデア一九三九年ノ春頃デアツタト記憶シテ居リマス

(2) 三國同盟論ノ眼目ハ支那事變ノ早急解決トイフコトニアツタノデアリマス、ト言フノハ當時日本ハ支那事變ノ長期化ニ焦慮シ萬全ヲ冀シテ之ヲ速ニ解決スベク熱望シテ居リマシタガ支那ノ背後ニ

ハ米、英、蘇ノ支援ガアリ之レガ支那ノ持久ヲ裏付ケテ居ルト見
ラレマシタノデ獨逸ノ中介デ速カニ支那事變ヲ解決シヨウトイフ
ダツタノデアリマス。此獨逸ノ中介ト云フコトハ昭和十二年ノ秋南
京占領前後駐支獨逸大使ヲ通シテ日支和平交渉ヲ依頼シタ事實ガア
リ、獨逸ノ支那ニ對スル發言權ハ當時モ尙相當強イトノ印象ヲ持ツ
テ居タカラデス

(3) 此ノ三國同盟締結ノ可否ニ就テ日獨ノ間ニ意見ノ一致ヲ見ナイ中ニ
一九三九年（昭和十四年）八月、獨蘇間ノ不可侵條約ガ不意打的ニ
締結サレマシタノデ三國同盟ノ締結ハ實現シマセンデシタ

三國同盟ニ就テ日獨間ニ意見ノ一致ヲ見ナカツタ要點ハ日本側ガ此
同盟ヲ對「ソ」防禦同盟トシヤウト云フノニ對シ獨逸側ハ對「ソ」
米英攻守同盟ニシヤウトスル點ニアツタノデアリマス

(4) 獨「ソ」不可侵條約締結以來我國内ニ於テモ亦陸軍ニ於テモ獨逸ニ
裏切ラレタトイフ印象ガ極メテ強烈ニナリマシタ。從ツテ其後我々
ノ周知スル限り國內ハ勿論陸軍部内ニ於テモ此獨逸カラ裏切ラレタ
ト云フ印象ハ日本ガ三國同盟ノ對象ヲ蘇聯ニ置イテ居ツタノニ拘ラ
ズソノ緊迫ト不可侵條約ヲ結ブ獨逸ノ眞意ガ如何ニ在ルカヲ疑ハズ
ニ居ラレナカツタコトニ起因シテ居ルノデアリマス、平沼内閣辭職ノ

ノ際ノ證明書中ニ「復雜怪奇」ト云フ書翰ガアリマスガ我々モ當時ノ
ノ獨逸ノ遣方ヲ此文字通りニ感じタ次第デシタ。斯クテ三國同盟ノ締
結ヲ問題ニスル者ハ益クナリマシタ

(5) 一九四〇年（昭和十五年）七月第二次近衛内閣成立後間モナク日獨伊
ノ三國同盟ガ締結セラレマシタガ之レハ松岡外務大臣ノ發案トイフコ
トデアリマシテ軍務局トシテハ何等聞知セストコロデアリマシタ、從
テ三國同盟締結ノ報ニ接シタ私共陸軍省ノ者ハ事ノ意外ナノニ驚イタ
次第デアリマス

(6) 昭和二十二年一月二十二日田中澄吉元陸軍少將ハ軍務局ニハ河部内閣
當時以來一貫シテ三國同盟ノ締結及ビ大東亞共榮圈建設ノ政策ヲ堅持
シテ居タト証言シテ居リマスガ三國同盟ニ關スル陸軍ノ態度ハ以上ノ
通りデアリマシテ田中少將ノ証言ハ事實ト考シク異ツテ居リマス又大
東亞共榮圈建設ヲ陸軍當局ガ政策トシテ決定シテ居タ事實モ亦無誤デ
アリマス

四 武蔵軍務局長ノ外交問題ニ對スル態度ニ對テ

(1) 武蔵少將ガ軍務局長ニ着任サレタノハ一九三九年（昭和十四年）十月
中旬デアリマシタ。私ハ三國同盟ノ件ニ關シテ武蔵局長カラ話ヲ聞イ
タコトハアリマセン

然シ支那事變ノ解決ニ就テハ屢々其ノ意見ヲ聞カサレマシタ。彼ハ支那事變ニ二年間居リマシテ支那事變ノ解決ガ非常ニ困難ナコトヲヨク知ツテ居リマシタ。ソシテ日本ノ爲ニ熱心ニ支那事變ノ解決ヲ望ミコレガ爲ニハ蔣介石ヲ相手トセズ等ト云フヤウナコトヲ言ハズ正面カラ蔣介石ヲ相手トシテ交渉條件モ思ヒ切り譲歩シテ和平ニ導カネバナラヌト云ツテ居リマシタ。更ニ彼ハ第三國トノ紛争ヲ避クベキコトヲ主張シテ居リマシタ。

(2) 一九四〇年（昭和十五年）五月獨逸軍ガダンケルクニ於テ英軍ニ勝利ヲ得タトキ私ハコレニ付テ武蔵ト議論ヲシタコトガアリマス其ノ時武蔵ハ「一般ニ我ガ獨逸ノ力ヲ過大評價シテ居ル者ガ多ク、ダガ獨逸軍ハドウバール渡ツテ英本國ニ進攻スルコトハ出来ナ

イ 英國人ハ米國ノ援助ヲ得テ必ず精神的ニモ物質的ニモ立ち直ルニ相違ナイ。従ツテ此ノ戦争ハ當然長期戦ニナルト見ナケレバナラヌ」ト主張シマシタ

三 日米交渉ニ對スル武蔵軍務局長ノ態度ニ就テ

(1) 私ハ一九四一年（昭和十六年）三月、野村大使ノ輔佐トシテ渡米シマシタガコレハ同大使カラ阿南陸軍次官、杉山參謀總長ニ輔佐官一

人ノ派遣ヲ要求セラレ武蔵軍務局長ガ私ヲ推薦シタ結果大臣ガ私
ヲ派遣シタノデアリマス
私ノ主ナ任務ハ全面的ニ野村大使ヲ輔佐スルコトデアリマシタ
私ハ日米國交ヲ速ニ回復セネバナラヌトノ見解ノ下ニ諒メ井川忠
雄氏ト打合せ米國。メリノールノ。ピシヨツブ。ウォルシユ氏。
メリノールノ事務總長ドラウト氏等ト協同シテ日米國交調整ノ私
的交渉ヲ進メテ居リマシタ。此線ニ沿ツテ日米間ノ交渉ヲ公式
化スル腹案ヲ持ツテ居リマシタ。近衛公モ我々ノ交渉ニ同意ヲ表
シテ居リマシタ
井川氏ト私トハ渡米後此ノ計畫ヲ野村大使ニ報告シマシタ。野村
大使ハ快ヨク贊成シテ下サイマシタ。爾後日米國交調整ハ此ノ
計畫ニ沿ツテ進捗スルコトニナリマシタ
サウシテ一九四一年四月十五日我々ノ執筆「日米諒解案」ガ野村
大使及「ハル」國務長官ニ依ツテ非公式ニ取上ゲラレ直ニ駐米大
使館カラ外務省ニ打電セラレマシタ。此ト同時ニ私ハ東條陸軍大
臣ニ對シ我々ノ日米諒解案ヲ支援スルヲ懇請スル電報ヲ發シマシ
タトコロ武蔵ハ大變專ンデ感謝ノ返電ヲ寄コシマシタ

(3)

私ハ其ノ後一九四一年八月ニ歸還ヲ命ゼラレテ歸朝シマシタガ歸朝
 後武蔵軍務局長カラ聞イタ所ニ依リマスト私ヤ井川氏ノ努力ノヤウ
 ナ外務省以外ノモノガ野村大使ヲ補佐スルコトニ對シ外務省ノ一部
 カラ批難ガ出テ居ルノデ今後ノ交渉ニ支障ガアツテハナラヌトイフ
 理由デ東條陸軍大臣ガ指示ヲ命ジタノダト云フコトデアリマシタ
 歸還後陸軍省ノ主腦部ニ報告シマシタガ私ノ努力ハ豫想以上ニ感謝
 謝サレテ居ルノヲ見出し愉快ナシタ。特ニ武蔵ハ今後ノ見送シニ付
 キ色々質問シマシタ

私ガ「自分ノ「ハル」長官ヤ「ウオー」カー」郵務長官ニ會ツテ話シタ
 印象デハ交渉妥結ノ可能性ガ十分アルト答ヘマスト彼ハ非常ニ喜
 ンデ居マシタ

其ノ後、私ハ歩兵師団長トナリ陸軍省ヲ離レマシタガ武蔵ガ最後迄
 日米交渉ノ妥結ニ努力シタコトヲ軍務局長ヤ參謀本部ノ私ノ知人カラ
 聞カサレマシタ

昭和二十二年（一九四七年）七月二日 於東京都大田區田園調布二ノ七八九

供述者 岩 畔 豪 雄

右ハ管立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ姓名捺印シタルコトヲ證明シマス

同七月二日 於 同所

立會人 原 清 治

8

良心ニ従ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ欺秘セズ又何事ヲモ附加セザルコトヲ
誓フ

宣
誓
書

署名捺印
岩
畔
豪
雄